

# 中級中国人日本語学習者のリピーティングパフォーマンス についての一考察

—キーワード記述の有無、再生回数、リピートした文の長さによる評価の視点から

董博（大連外国語大学・拓殖大学大学院博士後期課程）

キーワード：リピーティング 音節数 文の長さ 再生回数 キーワード記述の有無

## 1. 研究背景

目標言語との接触のチャンスの少ない海外日本語教育の現場では、例えば、中国の場合、特別な事情を除き、日本語が習得できる場は教室に限られている。その事情のもと、中国における日本語教室では、受容能力を産出能力に繋げていくために、さまざまな練習法が活用されている。その一つがリピーティングである。リピーティングとは聞こえてきた音声情報をポーズのあと原文のまま復唱するタスクのことである（門田，2012）。リピーティングは音声処理だけでなく、音韻処理、意味理解さらに文の産出に注意を向ける認知負荷の高い行為であり（董，2019）、外国語教育では、リピーティングが有効な練習法として活用されている（染谷，1996；Hiramatsu，2000；鳥飼，2003；小笠原，2006）。一方、第二言語習得分野で、リピーティングに類似している産出方法「Elicited Imitation（誘出的模倣）」（以後 EI と略す）があり、それも先行刺激文を聴取し、その後ポーズを置いてできるだけ正確にリピートするタスクである。EI は第二言語習得分野では学習者の文法能力、特に暗示的知識を測るテストとして活用され、最近の研究では、EI が学習者の中間言語知識だけでなく外国語のプロフィシエンシーの測定方法として応用価値も大きいと報告されている。（Erlam,R.2006;Kim,Y.&Tracy-Ventura,N&Jung,Y.2016;）。リピーティングと EI が言語産出面において類似している点からリピーティングもパフォーマンステストとして応用される可能性が示唆され、これまで EI 研究で明らかにされた点がリピーティングテストの開発には理論的根拠を与えている。実際、日本における日本語教育では、様々な指導法や練習法の効果を検証するためのリピーティングテストがある（岩下，2008；宮城・外崎，2010）。残念ながらこれらテストの共通点は実験用のテストであり、モデル文は単文が多く、筆記なしなどの点が挙げられる。よって、本研究は従来のリピーティングに使用された単文より長い複文に焦点を当て、さらに先行研究では解明されていない筆記あり（本研究ではキーワード記述という方法を採用）の場合のリピーティングにも注目し、中国人中級学習者向けの効果的なリピーティングパフォーマンステストを系統的に開発することを試みる。

## 2. 研究目的

本研究は中級学習者向けの効果的なリピーティングパフォーマンステストを探るため、それに関わる各要因（言語要因、実施要因）を明らかにすることを狙いとする。主に、文の長さ、実施回数、キーワード記述の有無などの要因がリピーティングパフォーマンスにどのように影響を与えるかを考察する。具体的に以下のリサーチクエスチョンを設定し調査を行うこととする。

RQ1：学習者が各モデル文において、回数毎にどの程度正確にリピートできるか。

RQ2：キーワード記述の有無によってキーワードあり群とキーワードなし群では差があるか。

RQ3：キーワード記述では上位群と下位群との間でどのような傾向が見られるか。

## 3. 調査の方法

### 3.1 調査の概要

調査機関は中国 A 大学で、調査対象は学習歴 2 年の日本語専攻生 17 人である。調査が始まる前に調査参加者をランダムに 2 群に分け、直前テストにより日本語レベルが等質 ( $p > .05$ ;  $t = 0.309$ ;  $df$

=15)であることを判断した。この2群をキーワード記述あり群(群名をRK群とする)とキーワード記述なし群(群名をR群とする)に分け、それぞれリピーティング調査を実施した。

### 3.2 リピーティングモデル文

今回使用するリピーティングモデル文は下記の考えに基づいて作成した。音声材料の話題は学習者が普段接触している、関心且つ親密度のある社会、文化、科学、経済、という四つのジャンルから選ぶこととした。モデル文を作成するにあたって、まず各話題には内容的にはほぼ同じもので、文に使用されている語彙と文法項目を全部既習内容とし、文構造の異なる複文を作成した。文構造は教科書でよく扱われている中級複文の文構造、いわゆる「連体修飾」タイプ、「名詞化」タイプ、「引用」タイプ、「副詞節」タイプに一文ずつ、四つの話題で合わせて16文を独自に作り、ネイティブ4人に確認してもらった。要するに、学習者の意味理解にハードルをかけない上での意味産出に注目するためである。紙幅の都合上、本稿は社会話題の名詞化タイプのモデル文の結果のみについて考察する。

### 3.3 調査の手順

調査実施前に、まず①モデル文で扱われている語彙や文法が交えてある語彙、文法チェックリスト表を配布し、学習者にチェック入れて既習確認をしてもらい、次に、RK群では②一人ずつ紙一枚配布し、③一回目にモデル音声を聞かせてキーワード記述させ、3秒のポーズのあとにリピートさせ、④リピートした音声をCALL教室で録音ソフトを利用して録音した。5回続いた。一方、R群でもほぼ同じ手順で同じく録音は5回とした。

## 4. 結果

### 4.1 語彙、文法チェック

調査実施前に、モデル文にでていた語彙や文法チェックリスト表を回収し確認したところ、ほぼ全員に既習のチェックがされているのがわかった。ただし17人中2人が「生む」という単語だけ既習チェックを入れていなく全員の11.76%の割合で過半数を超えていないため全員にとってそれは未習単語ではないと判断した。

### 4.2 RK群とR群の各回のリピートした音節数

本稿で扱うモデル文の内容は以下の通りである。「女性が産む子供の数が年々減少することは少子化といい、日本では近年深刻になっています」(42音節)。モデル文番号をA-I-1と記す。回数毎にリピートした文の長さは音節数で示されている。RK群R群のそれぞれパフォーマンスを次の表1と表2にまとめている。

<RK群の各回におけるリピートした音節数 表1>

番号	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
RK01	14	24	42	42	42
RK02	3	13	21	24	17
RK03	27	38	42	42	42
RK04	28	42	42	42	42
RK05	19	37	42	42	42
RK06	12	27	27	40	41
RK07	17	18	24	19	26
RK08	14	20	21	34	40
リピートした平均音節数	17 (39.88%)	27 (65.18%)	33 (77.68%)	36 (84.82%)	37 (86.9%)
上位群と下位群との平均値の差	20	25	21	21	21

<R 群の各回におけるリピートした音節数 表 2>

番号	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目	5 回目
R01	9	8	24	34	39
R02	9	33	41	42	42
R03	9	19	32	39	37
R04	8	21	26	35	35
R05	12	38	40	41	38
R06	9	17	28	39	40
R07	7	15	27	36	38
R08	7	13	21	22	29
R09	15	17	24	26	41
リピートした平均音節数	9 (22.49%)	20 (47.88%)	29 (69.58%)	35 (83.07%)	38 (89.68%)
上位群と下位群との平均値の差	7	25	17	36	10

まず、RQ1 への回答として表 1 と表 2 に示されているように、RK と R 両群は全体的に回数を追うことによってリピートした文の長さが伸び続けていることがわかる。両群とも 5 回目にリピートした文が一番長く、それぞれ 37 音節と 38 音節であるが、全体の 86.9% と 89.68% を占めている。両群とも 5 回目では全員のリピートパフォーマンスの上限が見られなかった。RK 群では 2 回目にリピートが完璧にできた学習者が複数現れたのに対して R 群では 4 回目に完全にできた学習者が現れた。各回において上位群と下位群とのリピートした音節数の平均値の差を計算したところ、5 回中 RK 群は 2 回目に一番差が大きく 25 音節であるのに対して、R 群は 4 回目に一番大きく 36 音節である。RK 群における上位群と下位群の差の順番は RK2 回目 > RK3 回目 = RK4 回目 = RK5 回目 > RK1 回目となり、R 群における差の順番は R4 回目 > R2 回目 > R3 回目 > R5 回目 > R1 回目となっている。

次に、RQ2 の両群で各回においてパフォーマンスの差があるかどうかを検討するため、各回に対応しない *t* 検定をかけた。その結果は表 4 にまとめた。

<各回における RK 群と R 群とのリピートパフォーマンスの差 表 3>

回数	<i>t</i> 値	<i>df</i>	sig.
一回目	2.435	8.225	<i>p</i> < .05
二回目	1.49	15	<i>p</i> > .05
三回目	0.79	12.312	<i>p</i> > .05
四回目	0.189	15	<i>p</i> > .05
五回目	-0.322	9.01	<i>p</i> > .05

\**p* < .05    \*\**p* < .01

結果からみれば、A-I-1 のモデル文のリピーティングにおいて最初の一回目だけ RK と R 両群の間に 5% 有意確率で有意差 (*p* < .01) が見られ、二回以降は見られなかった。

#### 4.3 キーワード記述における上位群と下位群の特徴

RK 群全員が 5 回ずつ書いたキーワードは表 4 に整理している。紙幅の関係上、上位群は RK03 と RK04 と下位群 RK02 と RK07 だけ取り上げる。最後の RQ3 への回答として、上、下位群のキーワードの記述は表 4 に示されており、下位群のほうはキーワードの記述量と回数が上位群より多く、記述情報が重複され、記述の内容には間違いがあるという傾向が見られた。それに対して、上位群ではキーワードに書いた語が簡略化され、情報が重複しないという傾向が見られた。また、上位群は記述の量と回数が下位群より少なく、四回以降キーワードの記述の必要がないと判断し、意味の再構築と産出につとめることが視える。

<モデル文における RK 群の記述キーワード 表 4>

学習者	5 回平均リ ピート音節 数	一回目	二回目	三回目	四回目	五回目
RK02	16	女性がうを、少子 化と言	子供のかすが、なってい ます	日本では近年、	年々減少する がことは	
RK03	38	女、うむ、子の数、 といい、で、	が、…が年年減少すること	は、少子化		
RK04	39	女、生む、↓、日本	が、数、では、近年	することは		
RK07	21	女、くどもの、日、 近年、深刻になっ て	が、年、減少	生む、少子化	かつと、年	かずか

## 5. まとめ

本稿は上述の 3 つのリサーチクエスションから出発し、音節数評価という視点でモデル文 A-I-1 におけるリピーティングパフォーマンスについて考察した。まとめてみれば両群は回数を増やせばパフォーマンスがだんだんよくなっていき、5 回目では平均して上限がみられなかったものの、回数をさらに増やせば上限が見られるであろう。しかし、テストとして、全員ができてしまうより、何回目に上位群と下位群との差が一番開いているかという視点がより重要であり、その視点からみれば RK 群のリピーティングは 2 回目に（最高音節数 42）、R 群のリピーティングは 4 回目に（42 音節）実施するのが妥当であろう。さらに、キーワード記述には上位群と下位群ではそれぞれの傾向がみられ、それもリピーティングはもっと意味理解に頼っている産出活動と裏付けられる

## 6. 今後の課題

本稿では、モデル文 A-I-1 についてリピーティングの結果を分析し考察したが、テスト開発に向けてレポートした文の長さや実施回数など、他の 15 文の分析結果を踏まえてから全体的に把握すべきである。また、今回は音節数による評価だけでパフォーマンスを検討したが、音声面における評価や文の意味産出における評価もパフォーマンスを検討するのに大変必要であり、更に日本語のプロフィシエンシーの測定との相関の検証と議論も重要でありそれらを含めて今後の課題とする。

参考文献：

- Erlam, R. (2006). Elicited imitation as a measure of L2 implicit knowledge: An empirical validation study. *Applied Linguistics*, 27(3), 464–491.
- Hiramatsu, S. (2000). A differentiated/integrated approach to shadowing and repeating, 『中国短期大学紀要』, 31, 311–322.
- Kim, Y. & Tracy-Ventura, N & Jung, Y. (2016). A Measure of Proficiency or Short-Term Memory? Validation of an Elicited Imitation Test for SLA Research: *The Modern Language Journal*, 100, 3, 655-673.
- 岩下真澄 (2008). 「日本語学習者におけるシャドーイング訓練の有効性—1ヶ月間の縦断的調査による検討—」 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第二部, 第 57 号, 219–228.
- 小笠原真司 (2006). Annual Review of English Learning and Teaching/JACET 九州・沖縄支部 (11) : 13–26.
- 門田修平 (2012). 『シャドーイング・音読と英語習得の科学』 東京：コスモピア
- 染谷泰正 (1996). 「通訳訓練手法とその一般語学学習への応用について」 『通訳理論研究』, 11, 27–44.
- 董博 (2019). 「复述与影子跟读认知特点比较与复述日语行为测试的开发」 『智富時代』 (2)
- 宮城幸枝・外崎淑子 (2010). 「日本語マルチメディア教材による自律学習の効果—リスニングスパンテストとリピーティングテストによる検証—」 『東海大学紀要』 留学生教育センター第 30 号 1–16.